

国際柔道連盟(IJF)試合審判規定の一部改正について

この改正点は、2008年10月20日、タイ・バンコクで開催されたIJF審判委員会において協議され、23日から開催された世界ジュニア選手権大会でテスト導入された。

その結果、特に問題なかったことからIJFでは2009年1月1日から正式に施行される運びとなった。

1. 「効果」の廃止

「効果」を廃止し、優勢勝ちの判定基準は「有効」以上とし、「有効」以上の得点差が無い場合には、ゴールデンスコアで勝敗を決する。

現状の「効果」に相当する技の評価はしない。「抑え込み」の場合も同様に15秒未満は得点とはならない。

2. 罰則の基準（「指導1」の場合は、得点としない）

「効果」の廃止に伴い、1回目の「指導」は得点とはせず、2回目の「指導」で相手に「有効」相当の得点が与えられる。但し、1回目の「指導」においても従来と同様に発声し、掲示板には表示する。

3. ゴールデンスコア

試合時間は3分間とし、「有効」を得た場合、または片方の試合者に2回目の「指導」が与えられた時点で勝敗が決する。3分間で得点差が無い場合は、旗判定で勝敗を決する。

ジュニア以下は試合時間4分間とし、ゴールデンスコアは2分間とする。

4. 場内外の判断基準

立ち姿勢において、どちらかの試合者の一部でも場内にある場合は試合を継続するが、双方の試合者の全身が場外に出た場合は「待て」とする。

（解説）

「場内から攻撃動作が始まった場合に限り」の考えは削除され、どちらかの試合者の一部が場内にある場合は攻撃・防御に関係なく、また止まっても動いても「待て」としない。しかし、双方が組み合っていない場合に片方が不用意に場外に出た場合、従来どおり場外として「指導」が与えられる。

（例）

場内にA、場外にBが立ち姿勢で組み合った状態で静止していたとき、Aが大外刈で攻撃したのでBはさらに後方に下がった場合、Aの軸足が場内に残っている場合（空中にある場合も含む）に限りその投げ技は評価され、Aの軸足が場外に踏み出した瞬間に「待て」となる。また、同様の攻撃があった場合、Aの軸足が場内に残っている間にBが返し技で瞬時に投げた場合、Aの着地した場所が場内であっても場外であってもその返し技は評価される。その場合、結果的にA・Bとも場外にあることが予想される。

5．相手のズボンを直接握ること

立ち姿勢における攻撃・防御の中で、直接ズボンを握った場合は、「待て」として「指導」が与えられる。但し、ズボンを握ると同時に施した大内刈や相手の脚を抱えて施す双手刈、朽木倒、掬投などを掛けることは認められる。

(解説)

立ち姿勢において直接ズボンを握る行為が禁止される。許されるものは、大内刈を掛けると同時に握ること、また「肩車」・「掬投」等の技に入った瞬間は手で抱えたが、技の延長線上で結果的にズボンを握った場合は認められる。但し、ズボンを握るタイミングが早いと判断された場合は「指導」が与えられる。

6．次の禁止事項を犯した場合は、より厳格に対処する。

腰を曲げ、頭を下げた低い姿勢を続けること

偽装的な攻撃をすること(掛け逃げ)

組み手を嫌うこと(早めに双方に「指導」を与える)。また、自分の襟を押さえたり、ただ相手の後襟を上から押さえ続けて相手に組ませないようにすること。

その他

1．敗者復活戦

世界選手権大会・オリンピックなどのIJF大会はベスト8に進出した選手のみが対象となる。
グランプリ・グランドスラム・マスターズなどの賞金大会では敗者復活戦は行われない。

以上